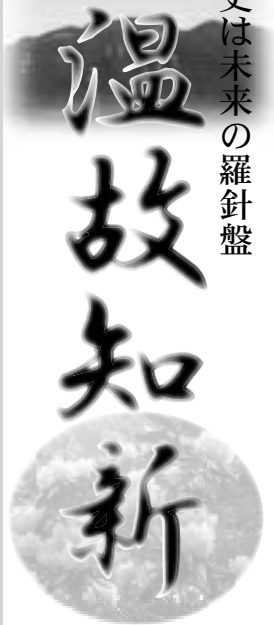


歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、および第五巻「文化財編」は、各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込み）で販売中です。ぜひお買い求めください。また、第六巻「民俗編」の予約も受け付け中です。

町史編さん室では、町史の刊行に向けて、日野町の歴史や文化などの調査を行っています。

今回は、滋賀県の選択無形民俗文化財ともなっている「ホイノボリのルーツ」と、製作技法についてご紹介いたします。

ホイノボリのルーツ

ホイノボリとは、長さ数メートルの竹ひごに白やピンクの薄和紙の花を付けたもの（ホイ）を、竹竿の先に付けた作り物です。現在、日野町内の七つの神社の春祭りに奉納されています。しだれ桜のように垂れ下がるホイがそよ風に揺られる様は、ふるさとに春を告げる風物詩として、人々に親しまれています。

では、このホイノボリのルーツはどのようなものでしょうか。その秘密はホイノボリの形状に隠されています。



▲ホイノボリの組立（増田）

除くと、その本体が「傘鉾」の形状に似ていることに気づかれます。傘鉾とは、神の霊を依り憑かせて移動する傘形の鉾のことです。古くは流行病を起すこととされた疫神を依り憑かせ、町や村から退散させる霊力をもつと考えられていました。

しかし、時代がくだるにしたがつて、色とりどりの布や造花を飾ったり、鉾の上に様々なダシを載せるなど、祭礼に彩りを添える作り物としての性格が強くなりました。馬見岡綿向神社に伝わる江戸時代前期の祭礼記録には、渡御行列の練り物として「作花」「笠ほこ」「母衣」などの名前が記されています。ホイノボリは、こうした練り物に変化して奉納されるようになったと考えられます。

ホイノボリの製作技術

このような由来をもつホイノボリの製作は、ホイノボリを奉納する神社の氏子の人々によって担われています。

その準備は、春まだ遠い真冬のうちに、竿とホイに用いるための竹を取るところから始められます。二月のホイ竹の製作に始まり、三月に入ると、ホイに付ける花作り作業が各家庭や会所で行われます。大屋神社や長寸神社など、大型のホイノボリは、一本あたり三

千個もの花が作られます。

三月末から四月にかけては、ホイマキと称される花付け作業や、ホイノボリの組立作業が会所などで行われます。ホイが美しくしな垂れるように仕上げるのが腕の見せ所です。このように、ホイノボリの祭りの魅力は、氏子の人々が力を合わせてその製作に取り組み、独自の民俗文化を伝承してきたところにあると言えるでしょう。

このような中、ホイノボリを製作する上で重要な存在である、ホイ竹の調達に危機を迎えています。自前で製作されている大字奥師を除き、多くの地域ではホイ竹の製作を桶職人に依頼して調達してきました。ところが、その製作を一手に引き受けてこられた最後の桶職人である中之郷の加賀爪氏が、高齢のため廃業され、後継者が不在となってしまったのです。

しかし、氏子の人々は、この危機を乗り越えるべく、加賀爪氏を講師に招いてホイ作り講習会を開くなど、新たな取り組みに着手されています。日野の春を彩るホイノボリ、その製作技術の伝承に向けた活動に期待が寄せられています。